The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語学が扱う時間の流れ
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 65-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語学が扱う時間の流れ

井元　秀剛

1. はじめに

本稿は言語学、とりわけフランス語学の立場から、時間の流れとしてどのようなものが想定され、どのような装置（概念）を用いて研究が行われているかの概観を行い、言語学研究のありようを紹介することを目的とする。

時間の流れといってもさまざまで、物語りの語り手が物語を語っている時間があれば、語られている対象の時間もある。前者は一人称小説として登場人物が顔を出している場合と、そうでない三人称の客観的な記述の場合では異なるであろうし、額縁小説のように、語りの構造が二重になっていたりする場合はさらに複雑になる。また後者の、描かれている対象の時間にしても、描かれている登場人物ごとに時間感覚は異なるだろうし、物語の描き方によっては時間を遡って記述することも可能であるから、その流れは決して一様ではない。文学研究の立場からすれば、作者が描く、その微妙な描き方の相違、さらにはその相違を通じて作者が何を描きたかったのかが問題になるのであろう。が、言語研究の立場からすると、問題になるのはあくまでも言語記号であり、記号とその記号が表す意味との関係である。「誰」が「どのような視点」で、「何」を描いているのか、というそれぞれの要素の考察は、その要素の違いが言語記号にどのような影響を与えるのか、という観点からのみ行われ、言語記号に非関与的であれば、とりあげるに値しないものなのである。

2. 言語学が扱う問題

それでは言語学は時間に関して実際にどのような問題を扱うのか、具体的に述べてみよう。最もわかりやすい問題は、時間を表す記号と、その記号が実際に表している内容との間に乖離がある場合である。例えばいわゆる「歴史的現在」とよばれる現在形の用法がある[1)]。

（1）La puissance militaire qui unissait l'Italie étant ainsi brisée, Hannibal *peut espérer* la désagrégation de la confédération. Effectivement, Capoue passe dans son camp, […]. Mais, contrairement aux espoirs du Barcide, ces ralliements ne *permettent* pas à la flotte punique de reprendre le contrôle de la mer. D'autre part, au milieu des épreuves, rassemblant toutes ses énergies, Rome a réussi au centre de l'Italie une formation politique d'un type nouveau, un véritable État national, […]. Les légions *se reconstituent* ;

1）以下の例文におけるイタリックおよび下線はすべて筆者によるものである。

la tactique de Fabius ayant fait ses preuves, elles *évitent* maintenant les grandes batailles et *s'appliquent* à «grignoter» patiemment les positions carthaginoises.（Encyclopaedia Universalis, Article «Hannibal» in（Vuillaume 2008:35-6）

(1) はその典型的な例で、描かれている対象は西暦紀元前のことなのに、現在のことを表すとされる「現在形」を使って書かれている。記号の機能と、実際に表している内容に乖離があるのである。といっても、この程度のことなら、別に壮大な言語理論をもちださなくても、ただ単に過去の現場に存在している人の視点をとって、あたかも目の前で展開している事実であるかのように描いているのだ、と説明すればそれですむ[2)]。しかしながら一般言語学的な観点から眺めてみるとことはそう単純でもない。過去のことでも現在形で表現するという現在形の使用は日本語にも存在する。

(2) a. The Inspector very kindly allowed me to accompany him to the Three Anchors. The garage was up a side street. *The big doors were closed*, but by going up a little alley at the side we found a small door that led into it, and the door was open.

b. L'inspecteur eut l'amabilité de me permettre de l'accompagner aux Trois Acres. Le garage se trouvait dans une rue adjacente. *La grande porte était fermée*, mais en remontant l'allée qui le longeait, nous découvrîmes une petite porte qui y conduisait. Celle-ci était ouverte.

c. ぼくが三錨亭に同行したいと言うと、警部は愛想よく許してくれました。ガレージは横町を少し行ったところにありました。大きなドアが閉まっています。けれども細い路地に通ずる横の小さな戸口があいていました。（アガサ・クリスティー『金塊事件』in 山村（2006））

(2) は英語の原文と仏語訳日本語訳を対照させたものだが、仏語訳でも過去形で示されている第三文の訳として、日本語の翻訳者は現在形を採用しており、この選択に全く違和感はない。これを過去の内容に使われた現在形だから、(1) のような歴史的現在と同じ処理でよいのか、よいとすれば、なぜ英語やフランス語ではここでそれが用いられないのか。その前後の文が過去形で書かれているのに、なぜこの文だけ現在形なのか、というような疑問が残る。また歴史的現在でないとすれば、この種の現在形はどう処理すればよいのだろうか[3)]。

記号と表現の乖離としては、副詞と時制[4)]との齟齬という問題もある。(1) にでてきた maintenant は現在形なので、特に問題にするにはあたらないが、

2）異論もある。Serbat (1980), Mellet (1980) などは、現在形無時間説をとり、現在形には過去を表す機能はないのだから、過去のことでも自由に書き表せるその例として、通常「歴史的現在」とされる用例を分析している。

3）この問題に対する具体的な考察は井元（2008,2010a）などを参照。

4）本稿では「テンス」を定動詞が表現する時間的意味を指す用語として用い、「時制」をそのような意味を表現する形態を指す用語として用いる。

maintenant は過去形の文の中にもでてくる。

（3） En 1691, Fontenelle était élu membre de l'Académie française et, en 1697, il était reçu à l'Académie des sciences, dont il fut secrétaire perpétuel à partir de 1699. Cependant la deuxième édition de l'Histoire des oracles suscita un orage contre l'auteur.
Les temps avaient changé depuis la première édition. *Maintenant* régnait le père La Chaise, confesseur du roi. Intransigeant et fanatique, il voulait étouffer les Lumières en atteignant le seul représentant qui fût accessible.
（Encyclopaedia Universalis, Article « Fontenelle » in（Vuillaume 2008:36）

maintenant や ici はトークン再帰表現と呼ばれ、話し手が言語活動を行っている時と場所を指定するのが本義である。とすれば、過去形の文の中で使用されていること自体がおかしいということになる。それでいながら（3）のような文に何の違和感も感じないのは、たとえ過去形で書かれていても、それを読む人間にとってはその描かれている世界にそのままおかれているような感覚がうまれ、その過去の世界に視点を移して、その視点の位置を maintenant と表現しているからだろう。ここに至って、過去形という時制が選択された基準点と、maintenant で指定された視点の位置との乖離が見られることになる。前者は時間軸 t 上の基準点なので t_0 と表記されたりもするが、筆者はメンタルスペース理論に依拠して分析を行うので BASE というスペースで表現し、後者も V-POINT というスペース名で表現する。本来は BASE の位置にあった視点が一時的に移動するというイメージである。BASE 以外にこのような基準点が必要なことは大過去の用法などを観察すると明らかである。ここで、ポールがピエールの発言を伝達しているという状況を考えてみよう。

（4） a. Pierre a dit : « Je suis allé à l'hôpital hier. »
b. Pierre a dit qu'il était allé à l'hôpital la veille.

（4b）は（4a）の直接話法を間接話法に変換しただけの文だから、同じ内容を表している。今ピエールが発言しているスペースを S_1、ピエールが病院に行ったスペースを S_2 とすると、suis allé という複合過去形は aller というイベントが起こったスペース S_2 が、S_1 からみて過去（PAST）の位置にあることを示している。（4b）はポールがピエールの話を伝達しているスペース S_0 から、S_1 と S_2 の関係を描いているのである。全体の時間関係を図示すると以下のようになる。

（5） $S_0 \xrightarrow[\text{PAST}]{} S_1 \xrightarrow[\text{PAST}]{} S_2$

メンタルスペース理論ではテンスを担う動詞の描く事態が成立するスペースを EVENT と呼ぶ。（4）の例では、aller という事態が成立したスペースであり、S_2 にあたる。BASE は発話行為を行っているスペースなので、ピエールの発話では S_1、（4b）のポールの発話では S_0 である。そしてこのボールの発話において、S_1 は V-POINT となる。ピエールの発話内容を伝達するわけだから、一時的にピエールの視点を経由して、イベントを述べるという形式をとっているのである。こう

してみるとテンスとはBASEからみたEVENTの時間関係を指定する指令であると考えることができる[5]。大過去とはPAST+PASTの価値をもったテンスであり、この価値を分析するためにV-POINTの概念は欠かすことができない。さらに半過去と単純過去の違いもこのV-POINTの概念を使って示すことができる。どちらの過去形もBASEからみてEVENTがPASTにあることを示しているのだが、単純過去の場合はV-POINTがBASEにあるのに対し、半過去の場合はV-POINTがEVENTにあると考えればよいのである。これはよく「半過去は視点を過去においたときの現在である」などと表現される内容を理論的装置を使って形式化しただけにすぎない。

さて、この話のきっかけになった副詞maintenantだが、結局BASEに準じた価値を有するV-POINTを指定するのだ、というように記述できれば、言語学のツールとしてのV-POINTは一層その価値を増す。ところが問題はそう単純ではない。半過去と単純過去の図式から、過去のEVENTとV-POINTが重なるのは半過去の場合だけで、単純過去の場合、V-POINTはBASEの位置にあるからEVENTとは重ならない。ここから単純過去の文の中でmaintenantが出てくることはない、ということになる。実際、実証的なKlum（1961）の研究によると、20世紀のあらゆるジャンルから抽出した第一次の60冊ほどの、そして第二次の141冊にわたる散文の調査の中から、単純過去もしくは前過去とともにmaintenantが使われた用例は一例も見つかっておらず、maintenantはこれらの時制とは共起しないという結論を導いている。しかしながら、皆無ではないのである。作家の個人的な文体の範囲に属するかもしれないが、Noël（1996）によると、Julien Gracqはこの副詞を多用し、単純過去と共起している例も単一の作品Château d'Argolの中に7例も見あたるのである。例えば

（6） Et maintenant, un grandissant malaise s'empara de l'esprit d'Albert, profondément altéré dupuis quelques instants par la réunion de ces objets dont le caractère paraissait si exclusivement emblématique.

（J. Gracq, in（Noel 1996:171）

などである。実際の用例を観察してみると（6）のように、特定の登場人物の心理描写に関係しているものが多い。これが文学の分析ならば、単純にAlbertの視点における「現在」を表していると解釈してすますことができるが、言語学者としては、なぜこのような環境の下で、本来なら共起しないはずの単純過去とmaintenantが共起するのか、というのは大問題なのである。

3. 言語学の装置

それでは、時間の問題の分析のために言語学はどのような装置を用意しているのであろうか。これはそれぞれの研究者が依拠する立場によってさまざまであるが、筆者としてはメンタルスペース理論の立場から、前節であげたBASE, V-POINT, EVENTというようなスペースをまずあげたい。これらの用語を初め

5）これは便宜的な規定であり、次節で修正する。

て用いたのはCutrer（1994）だが、実はこれら3つのスペース以外に、もう一つFOCUSというスペースを提案している[6]。これは英語などに顕著な完了形の価値を記述するために想定されたスペースである。

（7） a. Paul has lived in Japan.
b. Paul lived in Japan.

実際のところ（7）が記述している言語外世界の事実は、（7a）の現在完了形の場合も、（7b）の過去形の場合も違いはない。BASEからみて過去にあるEVENTでlive in Japanという事態が成立しているということである。異なるのは表現意図の違いだが、V-POINTはどちらもデフォルトのBASEの位置にあるだろう。ということは、BASE, V-POINT, EVENTの3つのスペースとPASTというテンス素性だけを用いては、（7ab）にみられるような現在完了形と過去形の違いは記述できないということになる。そこでFOCUSというスペースが提案された。これは話し手の表現意図の中心がおかれているスペースのことで、完了形の場合EVENTより時間的に後の位置に設定される。動詞のイベントそのものを描くことは話し手の意図からすると副次的で、話し手が描きたいのはイベントが完了している状態であり、（7a）の場合だと、BASEにおいて日本に住んだことがあるという経験を保持しているということなのである。そこで（7a）の現在完了形ではFOCUSはBASEの位置にあるのに対し、（7b）の過去形ではFOCUSも過去のEVENTの位置にあると考えるのである。時間副詞は原則としてFOCUSを指定する。

（8） a. *In 1972, Paul has lived in Japan.
b. In 1972, Paul lived in Japan.

（8）はin 1972というスペース導入詞によってFOCUSを1972年スペースに設定すると、このスペースはBASEからみると過去にあるのだから、BASEがFOCUSにならなくてはならない現在完了形は使えず、過去形だけが可能であることを示している。He's finished now.のようにBASEを指定する副詞なら現在完了形で用いてもかまわない。FOCUS概念が導入されると、テンスの定義も変わってくる。前節ではBASEからEVENTまでのアクセスパスがテンスであると述べたのだが、（7a）などの完了形では、テンスは現在で、アスペクトが完了である、と考えた方がよい。過去形などアスペクトが介在しない時制[7]ではFOCUSとEVENTが重なるので、テンスとは結局BASEからFOCUSまでの時間関係を指定したものということができる。このようにBASE, V-POINT, FOCUS, EVENTという4つのスペースの構成とそのスペース間の時間関係の指定により、自然言語のテンスの価値は過不足無く記述できるのではないか、とメンタルスペース理論では考えている。

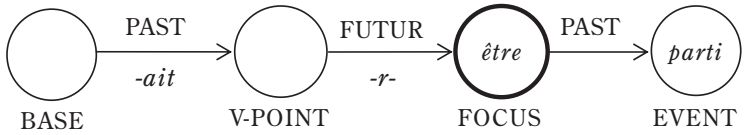
（9） Pierre a dit qu'il *serait parti* avant l'arrivée de Ricardo.

6）本稿で用いているBASE, V-POINT, FOCUS, EVENTというスペース概念に関する厳密な定義は井元（2010a, 2010b）を参照。

7）厳密にはテンスとアスペクトは定動詞がになう必然的な意味素性であると考えられ、過去形などはデフォルトのアスペクト値として「完成相（perfective）」が与えられていると分析する。

最も複雑な構成は（9）の serait parti という条件法過去の形態である。これは図示すると以下のようになる。

（10）



このように条件法過去はテンスとしては PAST+FUTURE であるが、定動詞は BASE から EVENT までのテンスアスペクト的価値が形態的に実現し、（10）のような解釈を得ることができるのである。

ここであげた 4 つのスペースと時間関係に比べるとそれ以外の装置は副次的なものでしかない。情報の伝達では A という人物が B という人物の発話を伝達するというように伝達の構造が複雑になることがあり、locuteur, énonciateur, narrateur などという似たような用語を区別して用いることがある。Ducrot（1980）の用語では実際に発話を行っている人を locuteur と呼び、発話内容に責任をもつ主体を énonciateur と言う。次の発話をポールがピエールのことを述べた文とする。

（11）Il a commencé à me faire des reproches. J'avais tout gâché, et j'aurais mieux fait de ne pas m'en mêler.　（Recanati 2008:6）

（11）において、il はピエール、je はポールを指す。第二文の場合、locuteur はポールだが、これはピエールの発話内容なので énonciateur はピエールということになる。発話の内容を含めて分析の対象にしたいのであれば、énonciateur を locuteur と別にたてることに意味はあるのだが、テンスの分析に関する限り、locuteur の発話位置が BASE であり、それを基準に 4 つの基本スペース（BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT）を配置していけばよいのだから、énonciateur をことさらとりあげる意味はない。（11）は伝達動詞が省略された間接話法の文であり、locuteur は伝達話者、énonciateur は被伝達話者であるにすぎない。とすれば、この区別はせいぜい話法の原理の説明ぐらいにしか使えず、（4）の分析でみたように、énonciateur にとっての BASE が V-POINT となることがある、という程度なのである。

4. 言語学の装置としての「時間の流れ」

時間の流れという本稿のテーマに則して言えば、Recanati（2008）がさまざまな時間の流れを contexte として提案しているので、それらについても検討してみたい。

まず、「外部文脈（contexte externe）」と「内部文脈（contexte interne）」を区別する。外部文脈とは実際に言語が発せられた文脈で、内部文脈とは言語が想定している文脈である。次の文は遺言を録音した発話で、locuteur の死後、子供達がその録音された遺言を聞いているという状況を想定している。

(12) Je suis mort, mes enfants, et vous voilà riches. (Recanati 2008:4)

(12) の外部文脈はこの金持ちがレコーダーの前で録音し、数年後に聞き手が聞く状況であるが、内部文脈は後者のみを指し、現在形などの時制の選択は内部文脈が決定する。ただし、次の文は少し複雑である。

(13) J'ai devant moi ta lettre, et tu as devant moi ma réponse.

(Recanati 2008:4)

(13) は手紙で書かれた文を想定している。外部文脈は実際に書き手が書いた状況と読み手が読む状況だが、その間に乖離がある。二つの現在形は共通の BASE を持っているはずだが、そこはどこなのか。書いているときか、読んでいるときか、どちらとも決定しがたい。しかし、これも内部文脈を考えれば解決する。(13) はメンタルスペース流に分析すると、スペースのブレンドである[8)]。書き手が手紙を書いているスペース A と読み手が手紙を読んでいるスペース B がブレンドされて、現実には存在しないスペース C が内部文脈として構築され、この C が BASE となっているのである。このスペースの中では、手紙を書く行為と読む行為が、会話を語る行為と聞く行為のように同時進行し、どちらも BASE の出来事として記述することが可能になる。歴史的現在形という現在形の使用も過去のスペースを BASE として、そのスペースから言語活動を行っているような内部文脈を構築していると考えればよい。結局、言語学が問題にする文脈は内部文脈だけであって、外部文脈など考慮するに値せず、この区別自体はあまり意味がない。Recanati (2008) 自身もそう考えているのだが、この区別をとりあげたのは (11) が、一見すると外部文脈が時制を決定しているともとれるからである。よりシンプルな構造である (4) をとりあげてみよう。(4a) におけるピエールの発言も、実際はポールが語っているのだから、外部文脈ではポールが実際に原発話の後に発しているのであり、代名詞も時制も locuteur をピエールとする内部文脈が決している。簡単に言えばピエールの文脈が内部文脈であり、ポールの文脈が外部文脈である。(11) も内容は複雑だが、同じ構造をしているとみなして、ピエールの文脈ではなく、ポールの文脈が時制を決定しているのだから、外部文脈によって時制が選択されているというわけである。これは (4a) と (11) における外部文脈と内部文脈の構造を同じとみなしたところに問題がある。(11) の第二文は冒頭に Il a dit que という伝達動詞が省略された間接話法の文 (の一部) と考えなくてはならず、伝達文としての外部文脈と内部文脈を考えるべきなのである。実際間接話法は内部文脈のレベルで locuteur の転換がおこっているのであり、この伝達文ではポールの文脈こそが内部文脈に他ならない。Recanati (2008) 自身も複雑な議論を経て (11) も内部文脈が時制を決定していると結論づけるのだが、上述したように考えた方が簡単だろう。結局のところ言語学的な議論のレベルでは内部文脈だけ考慮すればよい、ということになる。

ところが Recanati (2008) の話にはまだ続きがあって、(11) のように伝達動

8) ブレンドは自然言語でしばしば起こる現象である。詳しくは Fauconnier (1997)、Fauconnier & Turner (2002) などを参照。

詞が省略されていたりすると、ポールの文脈とピエールの文脈を区別したくなるらしい。内部文脈をさらに contexte locutoire と contexte illocutoire にわける。（11）の場合、locuteur のポールの視点で展開される文脈を contexte locutoire、énonciateur のピエールの視点で展開される文脈を contexte illocutoire とするわけである[9)]。そして次の文について

（14）Hélas, elle ne pouvait me recevoir maintenant ; mais elle me verrait demain avec plaisir. （Recanati 2008:10）

代名詞や時制は contexte locutoire が決定し、Hélas、maintenant、demain などの副詞は contexte illocutoire が決定していると述べている。もし、これが正しいとすれば contexte illocutoire が言語記号に影響を与えるのであるから、この区別も、さらにこの区別の元になる locuteur と énonciateur の区別も言語学の装置として取り込む必要がある。しかしながら筆者の考えは否定的である。この問題はメンタルスペース的に解釈すると、maintenant や demain が contexte illocutoire の BASE を基準にして使われているのか、contexte locutoire の V-POINT を基準にして使われているのか、という問題になる。前者は間接話法のように énonciateur が明確な場面でなければ構築されない。

（15）Pendant l'été 1829, Aloysia Langue rendit visite à Mary Novello. Celle-ci avait été une chanteuse célèbre et adulée; c'était *maintenant* une vieille dame pleurant sur son sort, mais Aloysia, emportée par l'enthousiasme, ne s'en rendit pas compte. （Recanati 2008:12）

（15）において maintenant が使われた文は、次の文の内容からいってもアロイージアが énonciateur でないことは明らかである。従って contexte illocutoire を基準に選択されたと言うことはできないだろう。一方（14）も（15）も maintenant は半過去とともに使われており、V-POINT を指定していることに変わりはない。contexte illocutoire を考慮に入れる必要は全くないのである。

ところが、maintenant というトークン再帰表現の分析にあたって Vuillaume（2008）はさらに別の時間の流れを考慮すべきだと主張している。彼が temporalité discursive と呼ぶ「語り」の行為そのものにかかわる時間である。次の例を見てほしい。

（16）Voilà ce qu'il était nécessaire d'apprendre au lecteur avant de lui montrer M. Cagliostro causant d'affaires avec M. de Crosnes. *Maintenant*, nous pouvons l'introduire dans le cabinet du lieutenant de police.

（Dumas, A., *Le Collier de la Reine*, in（Vuillaume 2008:49））

劇作家出身の Dumas は小説でも、しばしば（16）のように語り手が前面に顔を出した記述を行う。montrer や introduire という動詞は語りの言語行為の内容を表しており、maintenant もこの語りの時間を表している。しかしながら、この語りの行為にともなうメタ時間を次のような例にも Vuillaume（2008）は拡張するのであ

9）contexte（il）locutoire の命名にあたっては言語行為論の拡張があるが、その議論は複雑であり、本筋とは無関係なのでここではふれない。

る。

(17) Il [=d'Artagnan] entra l'hôtel sans faire d'autres questions. *Autrefois*, d'Artagnan voulait toujours tout savoir, *maintenant* il en savait toujours assez. (Dumas, A., *Vingt ans après* in (Vuillaume 2008:49))

Vuillaume (2008) のメインクレームは、過去形とともに用いられた tout à l'heure や maintenant は (16) のように言語行為における時間を表すとするものである。à l'époque dont nous parlons maintenant とパラフレーズしており、「今私が語っている場面では」という「語りの場」の言語を用いて「語られている場」を指示していると考えているのである。(17) の maintenant はスペース導入詞としての働きも担っており、autrefois で導入されたスペースと対比的に用いられている。この対比を認めながらなお、「語りの場」からの時間指示と矛盾するわけではない、としている。しかし、autrefois は物語世界の内部の、いわゆる「語られる場」の時間の流れに載せられる時間表現であるから、「語りの場」の時間表現と「語られる場」の時間表現が対比的に用いられてよいのか、という問題は常に残るだろう。また、tout à l'heure や aujourd'hui くらいなら「語りの場」の時間で「語られている場」の時間を指示していると考えられないこともないが、(14) の demain にまでは適応できない。読者が明日読むことになる状況などということは考えられないからである。それよりもなお、この考え方の最大の欠点は、maintenant が単純過去と共起できない、ということの理由が説明できないことである。通常行われている説明は、単純過去がもつアスペクトと maintenant が示すアスペクト属性があわない、ということなのだが、Vuillaume (2008) の説だと、maintenant が実際に修飾しているのは言表にあらわれないメタレベルの dont nous parlons maintenant の parler であるのだから、単純過去のアスペクトは問題にならないはずである。このような理由から筆者は言語学が扱う時間の流れは contexte locutoire における temporalité textuelle だけでよい、と考えているのである。もちろん (14) の場合は、メタ言語そのものが temporalité textuelle となっているのである。

5. 結論

以上のように言語学が想定し得る装置として様々な時間の流れをみてきたのであるが、結論は一つの流れだけでよく、その流れを 4 つの基本スペースの配置とテンス素性の組み合わせで記述すればよい、ということである。言語学が目指すものは、記号という対象に軸足を常において、できるだけ少ない装置を用いて、できるだけ多様な記号の現象を記述することなのである。時制形態だけでなく、時間副詞の分析もおそらくそれで十分であると思われる。今回とりあげた maintenant に関していえば、基本的には V-POINT を指定する、というものである。もちろん、その場合、まれであるとされながらも実例が存在する単純過去との共起の問題はどう解釈すればよいのか、というような問題はまだ未解決のまま残っている。

参考文献

Cutrer, M.（1994）, *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.

Ducrot, O.（1980）, *Les mots du discours*, Les Editions de Minuit.

Fauconnier, G.（1997）, *Mappings in thought and language*, Cambridge University Press.

Fauconnier, G. & M. Turner（2002）, *The way we think : conceptual blending and the mind's hidden complexities*, Basic Books.

井元秀剛（2008）「過去形に対応する現在形」『テキストの生理学』朝日出版社 , 167-180.

井元秀剛（2010a）『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房 .

井元秀剛（2010b）「日仏言語における「現在」－ V-POINT をめぐる対照研究－」『言語文化研究』36, 5-24.

Klum, A.（1961）, *Verbe et adverbe : étude sur le système verbal indicatif et sur le système de certains adverbes de temps à la lumière des relations verbo-adverbiales dans la prose du français contemporain*, Almqvist & Wiksell.

Mellet, S.（1980）, "Le présent 'historique' et de 'narration'", *L'information grammaticale* 4, 6-11.

Noël, M.（1996）, "Un fait de style : *maintenant* dans *Au château d'Argol* de Julein Gracq", *études de linguistique appliquée* 102, 157-174.

Recanati, F.（2008）, "D'un contexte à l'autre", *Cahiers chronos 20 Ici et maintenant*, 1-14.

Serbat, G.（1980）, "La place du présent de l'indicatif dans le système des temps", *L'information grammaticale* 7, 36-39.

Vuillaume, M.（2008）, "MAINTENANT en contexte narratif non-fictionnel", *Cahiers chronos 20 Ici et maintenant*, Rodopi, 35-51.

（大阪大学言語文化研究科　准教授）